



農業と女性 — J A 愛知東女性部の活動と組織原理 —

農山漁村地域の内発的発展に関する共同研究プロジェクト

明治大学 野生の科学研究所 所長	なか 中	ざわ 沢	しん 新	いち 一
明治大学 野生の科学研究所 客員研究員	いし 石	くら 倉	とし 敏	あき 明
明治大学 野生の科学研究所 客員研究員	あま 天	の 野	い 移	ざん 山
一般社団法人 J A 共済総合研究所 主席研究員	かわ 川	い 井	まこと 真	

アブストラクト

本稿は、農家の女性たちが自発的に複数の目的別の組織を運営し、それをネットワーク化した「高次元産業」のような事業に取り組みながら、一方では、助け合い組織を構成して介護予防や健康管理サービス、地域貢献活動や文化教室の開催など、多彩な活動を展開する J A 愛知東女性部の調査を通して、女性の潜在力と農業の「高次元産業化」の関係を分析し、組合の存在意義を明らかにするために開始した組合研究の序章である。約半年間をかけて現地調査と文献調査を行い、得られた情報を、主に人文科学に集積された知を用いて考察し、検証したものである。女性部の多機能ネットワークは内発的な進化を続け、すでに農業を核とする CSV（共通価値の創造）と農山村における地域包括ケアのモデルを^{ほうふつ}髣髴させている。

(キーワード) 地方創生 J A 女性部 祭 地域包括ケア

目次

序文：農業の高次元産業化と女性の潜在力 [中沢新一]
 本論：J A 愛知東女性部の活動と組織原理
 1. 組合活動の社会的基盤
 2. 農と地域の課題：「アイ」のある組合へ
 3. 山と海の出逢い：潜在する価値の発掘
 4. J A 愛知東女性部の創造力と想像力
 結びに代えて

序文：農業の高次元産業化と女性の潜在力 [中沢新一]

J A愛知東の皆さんとおつきあいするようになって、私は何回か三河地方の山間部を訪れるようになったが、そこで気がついたのは、「海」に関わる地名や人の名字が目立っていることだった。それに山間部の村に伝わる、有名な「花祭」の演目を見ても、海とのつながりをしめしているものが多い。そこで私は、この地方に文化を築いてきた人々が、もともとは海から内陸へ入りこんだ、安曇系や伊勢系の「海人」の伝統につながっているという、歴史学者の研究を思い出していた。いままでは農業中心の生活をおこなっている人々が、もとは漁業もやれば商業もやる、ときには芸能もやる、という海人特有の柔軟な生活感覚をもっている。この地方の人たちのことをよく知るようになればなるほど、私はそのことを強く意識するようになった。

歴史学者の網野善彦氏は、このような海人特有の柔軟な生活感覚から生まれた生業形態こそが、「百姓」ということばの本来の意味であることを明らかにした。それによると、近代になると百姓ということばは、もっぱら「農民」のことを意味するようになったが、もとは「多様な職種」をこなす器用人を意味していたのである。海人は半農半漁を生業形態とし、海岸部では漁業を主になし、内陸に入り込んでからは、もっぱら稲作中心の生活を発達させるようになった。

そういう海人的伝統から発達した「百姓」ほんらいの精神を、私は三河山間部に生きてきた人々のなかに、見出すことができたよう

に思った。百姓ほんらいの精神からすれば、農業は最初から「農」＋「加工」＋「流通」＋「食サービス」＋……からなる高次元産業なのであり、「農」そのものはこの高次元産業全体の土台をなすものでこそあれ、そのすべてではない、という真実が見えてくる。J A愛知東はいま、そういう高次元産業としての農業への脱皮をめざしている。農業を取り巻く環境は、いまとてもきびしい。そのきびしさをむしろ糧にして、この人たちは、海人的伝統に根ざす百姓のほんらいの姿を取り戻すことによって、近代社会のなかで抑圧されてきた、農業の潜在力を解き放とうという試みに賭けている。

こういう試みにあって、いちばん重要な要素となってくるのが「柔軟さ」である。柔軟さがなければ、農業はいつまでたっても、ほんらいの高次元産業への脱皮は図れない。この柔軟さが、いままで農業者の運動では表舞台に立つことのなかった「女性」のなかに潜んでいる、というのが、J A愛知東の発見であった。女性の発想は、とかく因習的な発想に縛られがちな男性のそれよりも、はるかに自由で柔軟である。ところが都会のオフィスで働く女性たちは、男性と同じ仕事をこなすことを要求され、せっかくの女性的潜在力を生かすことよりも、むしろ男性的な資本主義的合理性に自分を適合させることを、強く求められている。それに比較すれば、土壌や植物や動物などの生命を相手に仕事する農村部の女性のほうが、はるかに女性的潜在力を伸ばすのに向いている仕事をしている。農業の高次元産業化が成功するかどうかは、じつはこの女性の潜在力の解放にかかっている。

しかし、女性の潜在力が「自発的」に動き出せるようになるためには、まず男性が変わらなければならない。硬直した、権力的な思考では、「自然」のものである女性の潜在力を、のびのびと活動させることができないからである。だからまず男性がこのことを自覚し、変わらなければならない。それはJAの体質そのものに関わっており、本質的な変化は中央からではなく、地方組合のレベルからおこる必然性も、そこにある。JAが生まれ変わるためには、女性の潜在力を目覚めさせ生かすことができるか否かにかかっている。その意味でも、JA愛知東の活動は、ひとつの試金石である。

私たち（JA共済総合研究所+明治大学野生の科学研究所）がJA愛知東と共同でおこなっている本研究は、以上のような問題意識のもとに進められている。農業は直接に「自然」に触れている、現代では稀有な産業である。人間もまた生物として、ひとつの「自然」であることを考えれば、農業の重要性はきわめて大きい。私たちは、女性の潜在力を解放することによって、農業を高次元産業として生まれ変わらせようという大きな目標を抱いて、この研究を進めている。

本論：JA愛知東女性部の活動と組織原理

1. 組合活動の社会的基盤

本研究では、人間を社会の中心とするこれまでの産業研究を批判的に乗り越え、「人間と自然の共通社会の構築」という目標によって、農業の「高次元産業化」という課題を前進させたいと考えている。その上で重要な条

件となるのが、管内の90%を山林とし、三つの大きな河川の源流を秘めた、愛知東地域（東三河）の特性である。少なくとも今後の労働人口や農業政策との関係を見る限り、この条件は決して甘い未来を感じさせない。だが、人間中心の観点を反転させてみると、この条件はまた別の意味を帯びてくる。課題先進地域といわれる中山間地域は、全国的に共通する社会問題にいち早く直面するだけでなく、もっとも真剣にこれを乗り越え、やがて「自然と直面する社会」を迎えようとする先進地域でもあるからである。

愛知県の北東部に位置するJA愛知東は、新城市、東栄町、豊根村を管轄する協同組合である。豊かな山林と河川に恵まれたこの地域は、現在少子高齢化や過疎化といった問題に悩みながらも、健康管理活動、地域貢献活動、各種の体験研修、こども農学校の取り組みなど、高齢者や女性、子どもといったサブグループの関心や生活の必要性に根差したユニークな活動を行っている。

四谷の千枚田（愛知県新城市）



JA愛知東が、農業を経済活動として自立させる取り組みを展開しつつ、さらに生き甲斐や健康増進、社会的なつながり等を目指

す、地に足の着いた活動を継続している様子は、これまでも数多くのメディアで取り上げられてきた。とくに、「つくしんぼうの会」「ドレミの会」といった助け合い組織を運営し、リサイクルやゴミの適正分別、食と農業についての勉強会を行い、短歌・書道・生け花・手芸・ヨガ・パソコン教室など、多種多様な文化教室を実施する「女性部」の存在は、地道な活動を通じて大きな社会的評価を得るようになってきたと言えるだろう¹。

こうした女性部の組織は、小さな目的別の組織が自発的な活動を展開することで、全体として大きな成果を達成している。最初から抽象的な理想を掲げるのではなく、個別の組織の自発性や自主性を涵養しながら、息の長い活動を展開できる底力は、多様なプログラムだけでなく一貫した思想的背景にも求められる。すなわち、こうした活動の背景には、「農村と農業をどうやって自立支援していくか」という組合としての明瞭な問題意識があり、さらには「農業と健康寿命」や「医食同源・身土不二」といった身体や健康への関心、さらには「自然資源」「人的資源」の尊重といった社会的価値を踏まえたオープンなポリシー（活動方針）が存在する²。

J A愛知東女性部の個々の活動は、グループごとの主体性に任せられているが、それでもなお、それぞれの活動がバラバラな砂粒のように瓦解することがない。その理由は、①共通の目的を設定し、②世代間継承のシステムを構築し、③農業と非農業の次元を連結す

J A愛知東女性部との懇談会



る、という三つの基準が果たされていることが大きい。さらに重要なことは、上記の三つの基準をこれまで長期間に渡って支えてきた、この地域独自の文化資源を大切にし、継承していることが挙げられる。では、この地域には、いったいどんな文化資源が存在しているのだろうか。ここでは、J A愛知東の組合活動を支える潜在的な基盤を掘り起こしてみたい。

2. 農と地域の課題：「アイ」のある組合へ

日本の近代化の過程において、農村は大都市に食糧を供給する拠点と見なされ、また労働者や兵隊といった働き手の供給先とも見なされてきた。特に明治時代における地方の小農の暮らしは貧しく、苦しかった。農政官僚であった柳田國男は、こうした現状を改善することを夢見ながら、他方では日本の農村に暮らす庶民の生活習慣や心意伝承に着目し、これを研究の対象とする民俗学を創始した。柳田は、近代化の過程で見過ごされがちな、

1 【現地レポ】「J A愛知東女性部「自ら集まる組織」が地域を支えて」『農業協同組合新聞』2013.01.23

2 【個別報告②】河合勝正（2014）「地域と共にJ A愛知東が目指す相互扶助の土壌づくり」『共済総研レポート』No.132,14ページ

早川孝太郎



あるいは意図的に排除の対象ともなってきた習俗や文化についての包括的な記録と考察を開始したのである。

柳田國男と共に初期の民俗学を牽引し、特に諏訪湖から三河に到る天竜川流域の研究を行った先駆者として、早川孝太郎の名前を挙げるができるだろう。JA愛知東管内の三州横山（現在の新城市横山）で生まれた早川は、最初、大和画の画家を志して松岡映丘に師事したが、やがてその兄である柳田國男に出会い、民俗学という学問に開眼する。実際に自分の足で現地におもむき、人びとの生活を見聞きする民俗学の方法論に、彼は魅了されたようである。三河の農村出身で、類い稀な観察眼と直感力を持った早川は、民俗学黎明期にあって誰よりも「地に足の着いた」調査をおこなった観察者であったとも言われる。

だが、その早川が、奇しくも「組合」の語源について重要な考察を行っていることは、実はあまり知られていない。重要な研究の一つである『農と祭』のなかで、早川は平常時

の労働を支える組織原理と、祭りの運行を支える組織原理のあいだに有機的な関係を認め、この二つの時空が実際にはどのように関連しているのか、という大きな問題を追求した。この研究のなかで、早川は最初、群を離れたいわゆる「ひとつ猿」を、秋田の阿仁地方のマタギたちが「ハナレ」「ハナサレ」と呼んでいることに着目している。猿の社会のハナレ、ハナサレを、薩摩の黒島では「カタ」「カタハナサレタ」と呼ぶという。こうした孤立した個体は、猿の社会にあって生きにくい、疎外された存在だという。では、早川が注目した、その反対語はなんであろうか。

薩摩では、集団から分離した（「カタハナサレタ」）個体に対して、しっかりとした社会的な紐帯をもった仲間どうしの間柄を「アイ」と呼んでいる。早川はこの「アイ」を薩摩地方の方言として記録するだけでなく、日本列島に受け継がれた、相互扶助を表わす古語として析出した。すなわち、「薩摩の鹿児島郡には仲間を意味するものに相中の語がある。アイは愛するなど、もっぱら個人的感情の表明に使われるようになると、古い用例からは大分縁遠くなって、友愛とか親愛などと、新しい語の必要も起こって来る」³というわけである。

早川はここで、「アイ」とは、元来は「同じもの、仲間、ともどもにあること」であったと推論している。壱岐の島でいう「テアイ」とは、「手間」や「手伝い」と同じく「テ」を通して繋がる「アイ」の関係であり、大分県大分郡ではこのことを「デアイ」という。壱岐の島でいう「テエー」「テエーシゴト」

3 早川孝太郎「農と祭」『早川孝太郎全集第8巻』、70ページ

花祭



も同じ言葉の音便であり、共同の労働であった。早川によれば、「テアイ」の語は「どこまでも社会的」であって、親子や夫婦間の共同作業は含まない。近所隣り、または特別の関係で結ばれた家どうしが共同作業をする場合にのみ、この語を用いるのである。

早川によれば、「クミアイ（組合）はこれを相当する各個の力が相等しいことを前提としており、モヤイすなわちモアイの語が、モチアイ、アイモチと同一内容で、これまた各自の権利と義務が同じである場合に存在し得る」⁴という。このように「アイ」の語源を辿ってみることによって、たとえば合ノ山、相ノ浦、間の田といった地名起原が、各地の共同労働に端を発するものだという可能性が浮かび上がってくる。完全に文字化された近代社会の地理認識では、合、相、愛、間といった漢字の意味するところはバラバラである。しかし、早川によれば、これらの地名は等しく、かつて活躍した人びとの「アイ」の行為の賜物であったことになる。

民俗事例では、「アエノコト」「ミチアエマツリ（道響祭り）」など、「アエ」にまつわる祭事や地名も多く報告されている。早川はここにも着目する。曰く「変わった性質のものを一緒くたにするのが、やはりアエであって、別々に在るものが一つの場所に邂逅するのもアイで、ユキアイなどともいう」。さらに、「アエは^{あいなめ}相嘗などといい、たんに食物を共にするだけでなく、もっと^{ひろ}汎い意味があった」とも書いている。では、「アイ」はいったい、どんな意味で「汎い」のか。

「異なった性質のものが、ともどもにあるためには、相互の意思の疎通を図るべく、語りを必要としたことも考えられ、これがやがて懇親のしるしでもある。

各地に残る田楽とか田遊び等の神事芸に、神様が出てきて物語りをすることがあり、これの相方を承る役があった。セイノウ、モドキというのはそれに当たり、神と人がアイの境地に至る一種の世話係であり、時には通辞役であった」⁵。

ここで例示されているセイノウやモドキといえ、新野の雪祭りや三遠信の花祭などいわゆる「霜月祭り」の系統に登場する精霊で、異質な次元から現れる神の所作を真似、反復することで知られている。異質な性質なものが、その異質性を失うことなくある種の紐帯によって結ばれるためには、滑稽な仕種で来訪者の仕種を反復する道化や、理解することのできない言葉を通訳する「媒介者」が必要とされたのだ。それは、単に人と人との関係を指すばかりではなく、人が祭りのなかで神

4 早川孝太郎「農と祭」『早川孝太郎全集第8巻』、71-72ページ

5 早川孝太郎「農と祭」『早川孝太郎全集第8巻』、73ページ

や精霊と出会い、互いが異なった性質を保持したまま、束の間の交歓を果たすから「汎^{ひろ}い」のである。つまり「アイ」は決して人間社会に限定された紐帯ではなく、人間と非人間をつなぐネットワークをも意味することになる。

早川孝太郎の主著『花祭』で詳細に描き出されたように、東三河の村々では、いまでも共同で祭りの準備に当たり、いざ祭事ともなれば「アイ」の力を以て団結する。しかしそれは、決して同質的な集団原理に根差した祭りではなかった。悪態祭りの異名でも知られる通り、花祭は通常人前では許されない悪態が許されていた。そのため他村の若者は別の村の祭りにやってきて、わざわざ騒ぎを起こしたのである。また、この日は自由恋愛や性的なコミュニケーションが許される特別な日であり、朝鬼の襲来とともに、木の根を枕にして性的な遊戯に耽る「木の根祭り」とも言われた。要するに、花祭とは、異なる共同体や、異なる性や、異なる次元の存在（神、鬼、精霊）が時を定めて集まる機会であり、山から現れた鬼が象徴する自然の原理の過剰のなかで、「アイ」の原理によって他者と交わる特別な機会であった。

今日、JA愛知東の管轄地域では、早川孝太郎が同じ民俗学者の折口信夫とともに足繁く通った「花祭」が、貴重な文化資源として継承されている。そして、高齢化が進む中山間地域で、家に閉じこもりがちなお年寄りにJA女性部員のグループが助け合い活動をおこなうなど、先進的な取り組みが進んでいる。早川の鋭い考察を参考にするならば、こうしたグループの組織原理は「これを相当す

る各個の力が相等しいことを前提」としており、「各自の権利と義務が同じである場合に存在し得る」と言えるだろう。そして、組合活動と「花祭」の組織原理という一見縁遠い項目のなかには、地域のなかでバラバラになりつつある個人を再統合し、新たな社会性によって結びつけるという共通の知恵が隠れているかもしれない。

3. 山と海の出逢い：潜在する価値の発掘

早川が「セイノウ、モドキ」の例を挙げていたように、花祭の協同態としての「アイ」は、人間ではない死者や鬼、神や精霊をも招き入れ、さらに悪態をつく他集団をも受け入れる度量の深い原理であった。このことは、同じ語源から派生した「ユイ」において、さらなる展開を見せる。早川によれば、「アイ」の語に比べると、ユイの語は、一段と個人性を含みかつ団結的に強調味がある。結いは、別々のものを繋ぎ合わせ、または一つの中心に結び合わすことであった⁶。農村の共同作業のなかでは、田植えや稲刈り、脱穀や乾燥作業、茅葺きの吹き替えといった住居関連の仕事まで、「ユイ」の原理に基づいた共同の労働が必要になる。

ユイツ、イイデ、ムスデ、ヨデワラといった語は、いずれも農村で用いられる物の結束具の名前であるという。結合を「結う」とか「結ぶ」と言うように、茅や藁、葦などの植物繊維を編む技術は、縄文時代から続く樹皮の利用と並んで、農村で長期にわたって継承されてきた技術である。「締め(占め)」は「結う」に比べてより積極性を持ち、ヌサや注連

6 早川孝太郎「農と祭」『早川孝太郎全集第8巻』、75ページ

縄などの聖物の特徴を帯びることになる⁷。だが、ここでは百姓の生業と繊維結束技術の深層での連続性を説いた早川の議論を取って踏み越え、この技術を「海人」の技術に関連づけてみたい。モヤイという語が船を陸につなぎとめる技術を意味しているように、「結う」技術は海のものでもある。

伝統的な和船の造船技術者が口を揃えるところでは、船の素材が木材である以上、船大工は山に支えられた仕事であるという。伝統的に林業者など、山から木を伐り出す職能者と海を仕事場とする船乗りが意外に近い位置にいるのは、彼らが生活に必要な品々や食糧を、頻繁に交換・交易してきたからにほかならない。山の神がオコゼを好むという伝承は、日本列島の各地に広がっているが、これは和船の乗組員が熱心な「山の神」の信者であることと矛盾しない。山の幸と海の幸は、歴史的に常に交換されてきた。塩と米の交換、あるいは魚と野菜の交換など、産地を異にする食材・食糧の交換は、もっとも大きな価値を生む「市」を形成したのである。

一つの中心性によって定義される「ユイ」の原理は、おそらく海は海で、山は山で、里は里でそれぞれの社会的結合があり、それによって個人が結ばれる共同体の臨界を規定していったのだと思われる。だが、共同体は異なる共同体との間で物資やサービスを交換し、これが原初的な「市」として、交易拠点の端緒を築く。町の発達は、海と陸地のあいだ（港）や、山と里のあいだ（山裾）における交易によって促される。そこでは、いくつ

もの中心性が出逢い、海と山の産物が空間を移動する。

早川孝太郎が生まれた三州横山は、伝説によると、太古は一面の海で、豊川の東岸にそびえている舟着山の頂上の岩に、船をつないだという伝承もあったという⁸。付近には大海、有海、岩出、乗本といった、海民の生活を暗示するような地名が多い。また、かつては山中から伐り出した材木は、横山から筏を組んで運び、逆に川下から運搬船が川を遡ってきたこともあった。かつては日本中の川が、このように重要なインフラとして活躍し、山間の土地と海を結んでいた。日本の宗教学は、興味深いことに、多くの土地で山の神、船の神が女神として表象されてきたと説いている。かつての日本文化は、山や海の背後に女性性を認めた。

早川は先述した論稿「農と祭」のなかで、「ともどもにあることを本旨とし、さらにそこを基礎とする結束の圏外から追われて、ハナレ、ハナサレの境涯に陥ることが、いかに苦痛であり、重い制裁であったかを、現在の生活を通して訴えてみた」と語っている。社会的な紐帯が稠密であればあるほど、そこから外れるリスクも大きくなることはたしかである。現代の地域生活において重要なことは、かつてアイ、ユイ、ムスビといていた組合的な結合原理をそのまま再現することではなく、自発性や自主性をもとにその原理を新たな局面にもたらすことであり、それによって食と農、自然と社会、大地と身体のあいだの連関を更新することである。

7 早川孝太郎「農と祭」『早川孝太郎全集第8巻』、76ページ

8 早川孝太郎「三州横山話」『早川孝太郎全集第4巻』、150ページ

これからの地域社会で必要とされるセーフティ・ネットは、おそらく安全性だけを担保するのではなく、住民の趣味や生き甲斐の探究をはじめ、健康年齢の引き上げや若い世代の育成など、多角的な取り組みの展開によってはじめて実現可能となるだろう。さらに、単に地域環境を守るだけでなく、これを現役の資源として活かすことによって、地域の潜在力を引き出す経済的な循環が生まれ出されるかもしれない。こうした取り組みの先進事例として、私たちはJA愛知東のさまざまな実践例を再評価することができる。新鮮な野菜を買い手に届ける「朝トラ市」や、みずから種を採取し苗を育てる「山桜の里山づくり」、若者にチャンスを与える結婚相談活動、第一次産業への就職を支援する就農林相談会など、地域の潜在的な資源を引き出し、外からも人材を集めるプロジェクトが、少しずつ成果を現し始めている。

農業は決して単なる食糧生産のための技術に還元できない。食糧や生活資源の確保、換金作物の収穫、地域生態系への寄与、共同社会による子どもの育成、リタイアした営農者の介護など、農村がかつて果たしていた多角的な社会機能は、現在では組合活動を支える無数のプロジェクトとして稼働し、人間と自然を調停する実践として未来に受け継がれる。こうした活動を研究し、その内在的な価値を理解することは、「経世済民」を目標としていた初期の柳田國男の構想を引き継ぎ、将来的には日本社会の特性や地理的特性に合

わせた独自の「協同組合」や「産業組合」のあり方を構想する試みにも発展し得るだろう。

4. JA愛知東女性部の創造力と想像力

JA愛知東女性部のメンバーは、土地を愛し、人を愛し、地域の社会的課題を解決するために働く。それも、誰もが上機嫌で働いている。「彼女たちの自主的な活動のおかげで、この地域では高齢化や認知症問題も、怖くはないのです」とJA愛知東の河合勝正組合長に語らせる、そのエネルギーの源はどこにあるのか。じつは弁当や特産品の製造・販売は当然のこと、ミニデイサービスや家事援助サービスあるいは病院でのケア・ボランティアも、彼女たちにとっては農業の延長線上にある。したがって彼女たちの活動は、第1次産業を核とするCSV（Creating Shared Value：共通価値の創造）⁹と捉えることができる。さらには、医療機関と施設や在宅の間に彼女たちが介在することで医療・介護連携が促進され、それは農山漁村地域における「地域包括ケア・システム」¹⁰のモデルにもなり得る。すなわち女性の潜在的な感性で「人間」と「自然」を丁寧に織り上げ、農業という産業に新たな意味と価値を与え続けている彼女たちの運動は、農業という本業の価値を高めながら、一方では社会的課題を解決することにつながっている。それが図らずも行政サービスを補完——具体的には現金給付や現物給付などの行政負担を軽減し健全性を担保——することにもなるため（介護予防等）、農業を土

9 企業や団体が地域の社会的課題を改善しながら、みずからの競争力も高めていくための、ひとつの考え方。共通価値を創出し、社会発展と経済発展の両立を実現しようとする。

10 一般的には、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域システムをいう。

台とする地域ビジネスが、東三河の「まちづくり」そのものであることを確信させられる。

女性部の多機能・広域連携と連帯感を支えているものは何なのか。そこには三河という土地の風土も、少なからず関係しているように思える。共同の体験が集団への帰属意識を生み出すことは想像に難くないが、この地に特有の「花祭」や「盆行事」に代表される祭祀・祭礼の儀式が、集団の同質性や一体化を強める効果を増幅しているのではないだろうか、そのように感じられるのである。こうした呪術性は、人間であるか非人間であるかを問わず、自他の境を消滅させ、自己の拡大という経験をつくり出そうとする。このような体験が感性を研ぎ澄ませ、想像力を豊かにする効果を生み出しているとすれば、彼女たちは、自己の帰属する小集団の活動（部分）を、多種多様なグループで構成される女性部活動（全体）に重ね合わせ、それらを同じものとして認識できる能力を身につけているのかもしれない。そうでなければ、つねに流動する約1000人にも及ぶ女性たちが、ひとつのまとまりをもって、組織を運営していくことは不可能ではないか、と考えるからである。彼女たちを結びつけているのは、権力でも義務でも契約でもなく、ましてや経済的利益でもない。さりとしてボランティアをしているわけでもない。そこにあるのは共有された価値観である。

J A愛知東ならびに同女性部との共同研究の先に、農山漁村から発信すべき、来るべき経済の姿が映し出されるであろうことを確信して、本プロジェクトの最初の研究報告とする。今後の展開として、より具体的にこうし

た「組合」の実例を調査し、「農」や「食」の未来についてのビジョンを得ることを目指して、他地域の参考になるような研究を実施したい。

結びに代えて

平成26年11月28日に「まち・ひと・しごと創生法」が施行され、同法第8条の規定に基づき「まち・ひと・しごと創生」に向けた長期ビジョンと総合戦略が示された。これにより国民のまなざしが農山漁村のアルカイックな生活スタイルと豊かな自然にひき戻され、都市生活とは異なる、人間らしい、新しい生き方を再考する機会になるのであれば、それは歓迎すべきことだろう。このような政策目標や基本的方向が示された背景には、約10年後に迫ってきた本格的な高齢社会の到来いわゆる2025年問題が、少なからず関係している。2025年問題とは、日本の高度経済成長の原動力となった団塊の世代と呼ばれる人びと、そのすべてが、75歳以上の後期高齢者に突入することを意味するが、問題なのは、団塊の世代の大半が大都市圏とその周辺地域に集中しているという現実である。政策としての地方創生には、日本社会が抱えるこのような不自然な構造を是正したいという意図も含まれている。高齢社会における人口の偏在は、都市部における医療・介護システムの崩壊と、農山漁村地域における生活基盤の消滅という、双子のリスクをつくり出す。とりわけ日本はこの傾向が顕著である。それを踏まえれば、中央政府が地方創生という政策を打ち出したことには意味があり、国民へのリスク・コミュニケーションとしての機能も果た

したものと考えることができる。

しかしながら、そもそも「地方創生」は上からの号令で取り組むようなものではなく、それは地域住民の自発性と実行力によって内発的に作り上げていくものだということを、忘れるべきではないだろう。地域とは、その土地の自然と、そこで生きる住民たちが交流する、網の目のように入り組んだネットワークであるから、地域という生活の小宇宙を実感としてイメージできるのは、その土地に暮らす住民だけであろう。したがって「地方創生」といわれても、物理的な区画や境界線が引かれているわけではないため、具体的な場所をイメージするのは難しい。とはいっても、このような活動が日本の津々浦々で展開されるようになれば、それは望ましいことである。

私たち（JA共済総合研究所+明治大学野生の科学研究所）の共同研究プロジェクトは、農山漁村地域で自然と共生しながら心豊かに生きる多くの人びとに寄り添いながら、日本の原風景が残る農山漁村から、来たるべき未来を構想しようとしている。人文科学に集積された知を新たなステージへと昇華させ、人間の認識や社会の本質を——科学的根拠に基づいて——解き明かし、それを基礎として新たな運動論を展開しようとしている。したがって、それはプラグマティックな研究手法を取り入れた実践的な研究、いわゆるアクションリサーチでもある。私たちはこれから、豊かで活力ある暮らしの実現と永続的な地域社会づくりに取り組む人びとを支えながら、JAグループのみならず、共同体意識や

場所とのつながりを大切に考える多くのキーパーソンと協力・協働して、農山漁村地域における来るべき経済を、そして日本の来るべき未来をデザインするために、本研究プロジェクトを推進していきたいと考えている。

参考文献

- ・「JA愛知東女性部「自ら集まる組織」が地域を支えて」『農業協同組合新聞』2013.01.23
- ・河合勝正（2014）「地域と共にJA愛知東が目指す相互扶助の土壌づくり」『共済総研レポート』No.132
- ・早川孝太郎（1982）「農と祭」『早川孝太郎全集第8巻』未来社
- ・早川孝太郎（1974）「三州横山話」『早川孝太郎全集第4巻』未来社